



何を知る？



超音波検査は、**胎児が母親の子宮の中で心地よく生活しているかどうか**、それを知るための機械と考えてよいでしょう。心地よく感じている胎児は、発育は正常で、形態に大きな異常がなく、他の胎児たちとあまり変わらないような環境で過ごしているはずです。

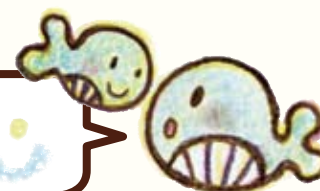
つまり、まず**胎児の大きさ**と**形**を見ることが大事です。それから**胎児の動き**や**胎盤**や**羊水**を見ることも大事でしょう。そのような胎児自身と胎児環境の状態をより適切に観察できるならば、その検査は胎児にとって、よりよい検査法といえるでしょう。

3Dでは胎児の顔つきや手足の動きを同時に見ることができます。しかし胎児の大きさを知ることは向いていません。ですからいくら3Dの性能が向上して、胎児がまるで目の前にいるように見えたとしても、2Dの超音波検査がなくなることはないと思います。

胎児を見るのは私たちですが、胎児にも見てほしい所見とそうでない所見があるでしょう。そして、上手に胎児を見てあげるためには、胎児について知ることのできる範囲と限界を理解し、胎児が見てほしいがっている情報について、上手に的確に拾い出せるような技術と知識を持つことが必要なのです。

この書籍では、そのような身につけるべき技術と知識について学ぶことにしましょう。

どう話す？



同じくこの書籍では、超音波検査の結果を両親にどう伝えるか、についてもお話しします。あるときは上級者に対して検査結果をどう伝えればいいのか、という話の場合もあるでしょう。

わかったことを話すことも難しいのですが、わからないことをわからないと説明することは、実はたいへん難しい場合があります。話し方のテクニックについても学んでいただけるといいですね。

また、専門用語は場合によって使い分けることが大事です。両親への説明には一般に専門用語を避けますが、相手が医療関係者の場合は専門用語の方が理解が早いこともあります。医療関連の説明は、**相手が理解しているかどうか**が説明（インフォームド・コンセント）の基本です。相手が理解しているかどうか、ということを確認しながらゆっくりとお話をしてあげましょう。